恋衣

山川登美子・増田雅子・與謝野晶子

詩人薄田泣菫の君に捧げまつる

絵画目次　［＃省略］

詩目次［＃底本では各項は、「君死に給ふこと勿れ」に合わせて均等割付］

恋ふるとて
いかが語らむ
皷いだけば
しら玉の
冥府のくら戸は

白百合

山川登美子

髪ながき少女とうまれしろ百合に額（ぬか）は伏せつつ君をこそ思へ

聖壇（せいだん）にこのうらわかき犠（にへ）を見よしばしは燭（しょく）を百（ひゃく）にもまさむ

そは夢かあらずまぼろし目をとぢて色うつくしき靄に

まかれぬ

日を経なばいかにかならむこの思たまひし草もいま蕾
なり

射あつべし射あてじとても矢はつがへ金（きん）の桂に額（ぬか）まけ
る君

恋せじと書かせたまふか琴にしてともにと植ゑし桐の
おち葉に

こがね雲ただに二人をこめて捲けなかのへだてを神もゆるさじ

手もふれぬ琴柱（ことぢ）たふれてうらめしき音をたてわたる秋の夕かぜ

何といふところか知らず思ひ入れば君に逢ふ道うつくしきかな

このもだえ行きて夕のあら海のうしほに語りやがて帰らじ

この塚のぬしを語るな名を問ふなただすみれぐさひとむら植ゑませ

紅(べに)の花朝々つむにかずつきず待つと百日(もゝか)をなぐさめ居らむ

ひとすぢを千金(せんきん)に買ふ王(わう)もあれ七尺みどり秋のおち髪

わが息(いき)を芙蓉の風にたとへますな十三絃をひと息(いき)に切(き)る

またの世は魔神（まがみ）の右手の鞭うばひ美くしき恋みながら
打たむ

袖たてて掩ひたまふな罪ぞ君つひのさだめを早うけて
行かむ

うつつなく消えても行かむわかき子のもだえのはての
歌ききたまへ

わすれじなわすれたまはじさはいへど常のさびしき道

ゆかむ身か

われゆゑに泣かせまつりぬゆるしませよわき少女にい
ま秋のかぜ

わが胸のみだれやすきに針もあてずましろききぬをか
づきて泣きぬ

狂へりや世ぞうらめしきのろはしき髪ときさばき風に
むかはむ

裾きえて蕋(ずゐ)のまなかに立つと見ぬ天(あめ)の香をもつ百合花(ゆりばな)のうへ

うるはしき神の旅路と答(いら)へまつりともづな解かむ波のまにまに

をみなへしをとこへし唯うらぶれて恨みあへるを京の秋に見し　（明治三十三年の秋）

にほひもれて人のもどきのわづらはし袖におほひていだく白百合

さらば君氷にさける花の室(むろ)恋なき恋をうるはしと云へ

その涙のごひやらむとのたまひしとばかりまでは語り得れども

その浜のゆふ松かぜをしのび泣く扇もつ子に秋問ひますな

狂ふ子に狂へる馬の綱あたへ狂へる人に鞭とらしめむ

薄月に君が名を呼ぶ清水かげ小百合ゆすれてしら露ちりぬ

とことはに覚むなと蝶のささやきし花野の夢のなつかしきかな

聴きたまへ神にゆづらぬやは胸にくしきひびきの我を語れる

手づくりのいちごよ君にふくませむわがさす紅（べに）の色に似たれば

里の夜を姉にも云はでねむの花君みむ道に歌むすびきぬ

紅梅にあわ雪とくる朝のかどわが前髪のぬれにけるかな

なにとなく琴のしらべもかきみだれ人はづかしく成れる頃かな

心なく摘みし草の名やさしみて誰におくると友のゐま

ひぬ

われ病みぬふたりが恋ふる君ゆゑに姉をねたむと身をはかなむと

髪あげて挿(さ)さむと云ひし白ばらものこらずちりぬ病める枕に

野に出でてさゆりの露を吸ひてみぬかれし血のけの胸にわくやと

世は下（した）にいかにも強ひようるはしき日知らで土鼠（もぐら）を掘るごと

ぬる蝶のなさけやさしみ瓜畑のあだなる花もひとめぐりしぬ

雲きれて星はながれぬおもふこと神にいのれる夕ぐれの空

かがやかに燭（しょく）よびたまふ夜（よ）の牡丹ねたむ一人（ひとり）のうらわかきかな

かずかずの玉の小琴をたまはりぬいざうちよりて神を
たたへむ　（新詩社をむすび給へる初に）

指の環を土になげうちほゝゑみし涙の面のうつくしき
かな

うるはしき［＃「うるはしき」は底本では「うるはきし」］
マリヤを母とよびならひわかき尼ずみ寺に年へぬ

誰がために摘めりともなし百合の花聖書にのせて禱り

てやまむ

くちなはの口や狐のまなざしや地のうへ二尺君は寵(ちやう)
の子

よわき子は天(あめ)さす指も毒に病む栄(さか)えを祝へ地なる醜草(しこぐさ)

いもうとの憂髪(うきがみ)かざる百合を見よ風にやつれし露にや
つれし　（晶子の君に）

垣づたひ萩のしたゆくいささ水にはぢらふ頰をばひた

しぬるかな

うけられぬ人の御文（みふみ）をなげぬれば沈まず浮かず藻にからまりぬ

くちぶえに小羊（こひつじ）よびて鞭ふりて牧場（まきば）に成りし歌のふしとる

木屋街は火（ほ）かげ祇園は花のかげ小雨に暮るゝ京やはらかき

世のかぜはうす肌さむしあはれ君み袖のかげをとはにかしませ

利鎌（とがま）もて刈らるともよし君が背の小草のかずにせめてにほはむ

いろふかくゑまひこぼるるこの花よたまひし人によく似たるかな

わが舞へる扇の風に殿（との）の火を百（もゝ）の牡丹のゆらぎぬと見る

いかならむ遠きむくいかにくしみか生れて幸（さち）に折らむ
指なき　（以下十首人に別れ生きながらへてよめる）

地にひとり泉は涸れて花ちりてすさぶ園生に何まもる
吾

虹もまた消えゆくものかわがためにこの地この空恋は
残るに

君は空にさらば磯回（いそわ）の潮とならむ月に干（ひ）て往ぬ道もあ

るべき

待つにあらず待たぬにあらぬ夕かげに人の御車(みくるま)ただなつかしむ

今の我に世なく神なくほとけなし運命(さだめ)するどき斧ふるひ来よ

燃えて〱かすれて消えて闇に入るその夕栄(ゆふばえ)に似たらずや君

帰り来む御魂と聞かば凍る夜の千夜（ちよ）も御墓の石いだかまし

おもひ出づな恨に死なむ鞭の傷（きず）秘めよと袖の少女（をとめ）に長き

夕庭のいづこに立ちてたづぬべき葡萄つむ手に歌ありし君　（以上）

みてづからひと葉つみませこのすみれ君おもひでのなさけこもれり

花さかばふたりかざしにさして見むこのすみれぐさ色はうつらじ

あたらしくひらきましたる詩の道に君が名讃（たゝ）へ死なむとぞ思ふ

わが手もて摘みてかざせるひと花も君に問はれて面（おも）染めにけり

いづこ踏みいかに帰らむちる花は山をうづみぬ我をめ

ぐりぬ

誰がためにつくる花環とほほゑみて花の名をさへ問ひたまふかな

手づくりの葡萄の酒を君に強ひ都の歌を乞ひまつるかな

迎へ待つ君は来まさずわが駒に百合の花のせ綱ひく夕野

ほほゑみて火焔(ほのほ)も踏まむ矢も受けむ安きねむりの二人(ふたり)いざ見よ

それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ　（晶子の君と住の江に遊びて）

羽子(はご)よ毬よみな母君にかくされて肩上(かたあげ)あとの針目(はりめ)さびしき

くれなゐに金糸の襟の舞の子を三月(みつき)画にすと京にある君

紅筆（べにふで）にわづらひたまふ歌よりも雪の兎に目をたまへ君

見じ聞かじさてはたのまじあこがれじ秋ふく風に秋たつ虹に

きぬでまりましろきなりに春のきてかがる色糸（いろいと）みなもつれたり

たてかけし琴の緒ひくくひびきたり御袖のはしも触れじと思ふに

てずさびにつなぎし路のいと柳誰れその上をまたむすびたる

ちる花に小雨ふる日の風ぬるしこの夕暮よ琴柱（ことぢ）はづさむ

春さむし紅き蕾の枝づたひ病むうぐひすの戸にきより啼く

瞳（ひとみ）まだ栄（はえ）に酔はすな春の雲と袖もておほふ雛のうぐ

ひす

夕顔に片頰あたへしおごりびと妬たしと星も今ちかう
降れ

飢ゑていま血なきに筆もちからなし人よ魔と書く文字
をしへね

みいくさの艦（ふね）の帆づなに錨（いかり）づなに召せや千すぢの魔
もからむ髪

ふる鏡霜に裂けたるこだまなし夜烏（よがらす）むせび黄泉（よみ）にや帰る

かたつぶりひさしに出でし雨ふつ日瓦にさきぬなでしこの花

たもち得ぬ才はたとへばうまざけの破（や）れし甕（かめ）にも似たるこの人

ましら羽の鳥に啣（ふく）ます花ひとつ武蔵のあなた十里におちよ　（上総なる林のぶ子の君を懐ひまつりて）

髪なでて鏡ゆかしむ夜もありぬ夢にや摘まむしろ百合の花

わが袖も春のひかりの帰らじや牡丹剪(き)らせて皷(つづみ)に添へば

雲に見る秋のうれひを葉に染めて泣くにしのぶに陰よき芭蕉

扇なす彩羽(あやは)の孔雀鳥の王おごりの塵を吹く春のかぜ

大原女（おはらめ）のものうるこゑや京の町ねむりさそひて花に雨ふる

おばしまの牡丹の花に額（ぬか）たれて春の真昼をうつつなき人

幸（さち）はいま靄（もや）にうかびぬ夢はまたしづかに降（お）りて君と会ひにけり

薔薇（ばら）もゆるなかにしら玉ひびきしてゆらぐと覚ゆわが

歌の胸

せめてただ女神(めがみ)の冠(かむり)しろ百合の花のひとつと光(ひかり)そへむまで

地にわが影空(そら)に愁の雲のかげ鳩よいづこへ秋の日往ぬる

虹の輪の空(そら)にながきをたぐりませ捲かれて往なむこの二人(ふたり)なり

戸によりてうらみ泣く夜のやつれ髪この子が秋を詩に問ふや誰

歌あらば海ゆく雨に添へたまへ山に夕虹なびくを待たむ　（上総の浜辺に夏を過ぐせるまさ子の君に）

夕潮に玉藻（たまも）よる音（ね）の秋ほそしさばかりをだに命なる歌

髪ながうなびけて雲はそぞろなり入日と風と恋をいどめる

鞭拍子（むちびやうし）やうやく慣れて南国（なんごく）の牧場（まきば）の春の草に歌よき

百合牡丹犠（にへ）の花姫なほ足らずばひじりの恋よ野うばらも枕（ま）け

しら鳩も今むつまじく肩にきぬ君西びとの歌つづけませ

さりともとおさへて胸はしづめたれ夜を疑ひの涙さびしき

思あれば秋は袖うつひと葉にも涙こぼれて夕風黄（き）なり
いつはりの濁るなみだのかかりなばこの袖たちてまた
君を見じ

秋かぜに御粧殿（みけはひどの）の小簾（をす）ゆれぬ芙蓉ぞ白き透き影にして
ゆふばえやくれなゐにほいむら山に天（あめ）の火が書く君得
しわが名

ぬのぎれに瓦つつみて才（さい）はかる秤器（はかり）の緒にはのぼされ

にけり　（以下拾弐首さることのありける時）

おとなしく母の膝よりならひ得し心ながらの歌といらへむ

鋳られてはひとつ形のひと色の埴輪（はにわ）のさまに竈（かまど）出でむか

ひとりにはあまりさびしき秋の夜と筆がさそひしまぼろしよ君

地にあらず歌にただ見るまぼろしの美くしければ恋とこそ呼べ

書よみて智慧売る子とは生れざり蛇（へび）のうすぎぬ価ある世よ

いきづけば花とかをらむ思あり人のいのちの燃ゆる胸より

相ふれては花もうなづく浪も鳴る枯木（からき）青木（あをき）も山を焼きぬる

おもひでを又はなやぎてかざらばや指さす人に歌ひ興ぜむ

歌よみて罪せられきと光ある今の世を見よ後の千とせに

師と友とわれとし読みてうなづかば足るべき集（しう）と智者（ちしや）達に言へ

あなかしこなみだのおくにひそませしいのちはつよき

声にいらへぬ

みをつくし

増田まさ子

しら梅の衣（きぬ）にかをると見しまでよ君とは云はじ春の夜の夢

恋やさだめ歌やさだめとわづらひぬおぼろごこちの春の夜の人

むつれつつ菫のいひぬ蝶のいひぬ風はねがはじ雨に幸（さち）

あらむ
飛ぶ鳥かわがあこがれの或るものかひかり野にすと思
ふに消えぬ
歌ひとつ君なぐさめむちからなし鬢の毛とりて風にこ
とづてむ
母恋ふる心わすれてあこがれぬやさしおん手のひと花
ゆゑに

みやこ人(びと)の集(しう)のしをりとつみつれどふさひふさふや
楓(かへで)のわか葉

なさけ未(いま)だよわきはげしきさだめ分かず酔へりとのみ
のこの子と知りぬ

かゝる夜の歌に消ぬべき秋人(あきびと)とおもふに淡(うす)き裳(も)もふさ
ふかな

世にそむき人にそむきて今宵また相見て泣きぬまぼろ
しの神

われにまた山の鐘鳴るゆふべなり雫（しづく）や多き涙や多き

似つかしと思ひしまでよ菖蒲（あやめ）きり池のみぎはを南せし人

あすこむと告げたる姉を門（かど）の戸にまちて二日（ふつか）の日も暮れにけり

髪ときて秋の清水にひたらまし燃ゆる思の身にしきるかな

うらみわびこの世に痩せし少女子のひくきしらべをあはれませ君

みふみ得しその夕より黒髪のみだれおぼえて涙ぐましき

痩せ指に小鬢（こびん）のぬけ毛からめつつさてこの秋にふさふ歌なき

人の名も仏の御名も忘れはて籠に色よき野花（のばな）つみぬる

しら梅の朝のしづくに墨すりて君にと書かば姉にくまむか

二十とせは亡き母しのぶ夢にのみ光ほのかにさすと覚えし

わりなくも琴にのぼせて恋得つと御歌（みうた）のぬしに告げば如何ならむ

つらき世のなさけいのらぬわれなれど夕となれば思ぁ

まりぬ

須磨琴（すまごと）のわかきわが師はめしひなり御胸（みむね）病むとて指の
細りし

ねいき細きこのわがのどに征矢（そや）ひきて夢路かへさぬ神
もいまさば

川くまのふたもと櫟（いちひ）かげみれば猶も君見ゆわれ遠ざ
かる

わりなくも君が御歌に秋痩せてよわき胡蝶の羽(は)もうら
やみぬ

はかり得ぬ親のこころをかへりみずゆるせと君にもの
いひてける

わが面(おも)の母に消(に)るよと人いへばなげし鏡のすてられぬ
かな

ちる花のしたにかさねてまかせたり君が扇とわが小鼓(こつづみ)
[#ルビの「こつづみ」は底本では「こづつみ」」と

紅梅の真垣のあるじ胸をいたみ泣くを隣りに小琴ときぬ

みなさけのあまれる歌をかきいだきわが世の夢は語らじな君

君によき水際（みぎは）や春の鳥も啼く細き柳は傘にかかりぬ

その御手にほそきかひなをゆるしませくづるる浪のはてしなくとも

京の春に桃われゆへるしばらくをよき水ながせまろき山々

夢に見し白き胡蝶の忘れ羽かあらず小百合（さゆり）のそのひと花か

泣きますな師をなぐさめむすべ知ると小百合つむ君うるはしきかな　（以上二首は登美子の君に）

つらきかな袖に書きてもまゐらせむ逢はで別るゝ歌の

みだれよ

なにとなきとなり垣根の草の名も知らばやゆかし春雨の宿

あづま人（ど）が扇に染めし梅の歌それおもひでに春とこそ思へ

この世をもはては我身も咀はるる竹ゆく水に沈む日みれば

袖おほひさびしき笑みの前髪にふさへる花はしら梅の花

うぐひすを春の桜におほはせて水の月さす夏の夜きかむ

山かげの柴戸をもれししはぶきに朝こぼれたりしら梅の花

われ思へば白きかよわの藻の花か秋をかなたの星うけて咲かむ

桃さくらなかゆく川の小板橋（こいたばし）春かぜ吹きぬ傘と袂に

よき里と三とせ御筆（みふで）のあとに見き今宵虫きくうす月の路

（渋谷にて）

君待たせてわれおくれこし木下路（こしたぢ）ときのふの蔭の花をながめぬ

花こえてその花をりて垣にそふ夢のゆくへの家うつくしき

初秋（はつあき）や朝睡（あさい）の君に御湯（みゆ）まゐる花売るくるま門（かど）に待たせて

奇しきもの指につたへて胸に入る神も聞きませ七つの緒琴（をごと）

こは天（あめ）か人のさかひかまた逢ひぬ飽かずと泣きてわかれにし君

まれびとに椎の実まゐる山ずみの静なる日や秋の雨ふ

る

わが袖に掩ひややらむかれ〴〵の野花（のばな）はなれぬ蝶のま
しろき

わづらひかこれうらぶれか春のうすれ暮うするる夕栄（ゆふばえ）
を見る

みづいろの帯ふさはずやみだれ髪花のしろきに竹の青
きに

うつくしき水に小橋に名おはせて里ずみ三月（みつき）うらわかき人

その神のみすがた知らず御名（みな）知らず夢はましろの百合の園生に

まぼろしにうつらむものかわがおもひ紅きむらさき色のさま〴〵

うたたねの額（ひたひ）にかづく春の袖繍（ぬ）ひ来（こ）牡丹とこがねの蝶と

今はただ歌の子たれと願ふのみうらみじ泣かじおほかたの鞭

うつつなき春のなごりの夕雨にしづれてちりぬむらさきの藤

心とはそれより細き光なり柳がくれに流れにし蛍

あゝ君よ心とわれと別れきぬ深山に似たる秋かぜの家

[＃「秋かぜの家」は底本では「秋かぜの」]

花や雨や野の紫や春のひと酔ひてしばしの夢まどろまむ

海棠の室（むろ）に歌かく春の宵ものあくがれの酒われに濃き

栄（はえ）とくやもろしと云ふや君よ人よ蝶のむくろに春をうらなへ

このゆふべ色なき花にまたも泣くえにしつたなき春のわすれ子

髪あらへば髪に花さき山みづにさくらいざよふ清滝の里

野の虹のかたへうすれて鐘なりぬ柳にしばしたたずむや誰

奥の院の夕の壁に歌も染めず白き桔梗をたをりて下(お)りぬ

おきてたるさとしかしこみ国出づと母の御墓の花に泣

く人

ながれゆく汝れよ笹舟しばしまてこの歌染めていのち与へむ

紅蓮(べにはす)の花船ひとつ歌のせて君ある島へ夕ながさむ

夏くさを一里わけたる君がかど昨日も笑みてただに別れぬ

衾(ふすま)ぬけて戸をくる京の雪の朝この子が思ひ詩によみ

がへる

病む鳥を籠にあはれむ夕ばしら憂かりし春の又も眼に満つ

簾(すだれ)背(せ)に春の眼によき玉おばしま比良の［＃「の」は底本では判読不可］むらさき二尺に足らぬ

おとろへにひとり面瘦せ秋すみぬ山の日うすく銀杏(いてふ)ちる門(かど)

わが友の照る頰の春よ淀川のみどりあふれて君が門(かど)ゆけ

（以下二首京にありしほど浪華の友に）

肩あげによき頰のにほひ君が春を才に耻もつわれ京の姉

ふと倚るに見たるは清き高きまどひその昨日(きのふ)もつしら梅の花

拍つ手ここに御池(みいけ)の緋鯉なれつるよ一人(ひとり)を京の春の子老いな

まぼろしに得たるみすがたたどる眼にいつしか霧の枯野を得たり

わが魂を武蔵やいづこ水よ引け夜（よる）の二百里花ふらしめよ

御手（みて）もろともそよ片山のこがらしにまぎれ消ぬべき我ならばとも

おんすくせわかき御尼（みあま）に泣かれけり堂の夕寒（ゆふさむ）わが袖ま

ゐる

寒菊に涙さびしき夕別れせつなき別れ西の京にして

わがなれぬ寒さの袖にまたも雪凪は愛宕の北のおろしよ

そのおもざし姉に似たるにまた泣きぬ雨のまくらをふた夜の人や　（弟と京にてよめる）

知らざりしほころべば　[＃「ほころべば」は底本では「ほ

ころべは」　黄に紫にきのふ垣根に名なかりし草

舟にして蓮きる御手の朝うつくし十九を滋賀の水によき君　（友に）

なぐさめむ人なき寮の夜のさくらおなじ愁の君にちるべき

夜の柳ひくき浪華の水なりき歌うて過ぐる君とのみ見し

笛を追ひてゆふべ船やる水一里蓮(はす)の香のせて櫓にやはらかき

なぐさみぬ都の旅の秋の身も歌に笑む夜は足る人のごと

李(すもゝ)ちる京の夕かぜ又も泌(し)むひととせ見たる美くしき窓

ゆく春をひとりしづけき思かな花の木間(このま)に淡(あは)き富士見ゆ

江戸川のさくら黄ばめる朝靄にわかれし人をえこそ忘れね

春雨に山吹うかぶ細ながれみどりこなたへ君をいざなへ　（東の京より西の京の友へ）

秋の日のこがねにほへる遠木立（とほこだち）そこにか母のありかたづねむ

磯にして君を思ふに清き夜や歌とは云はじ浪に得し珠

（以下二首上総の海辺にて）

汐あむや瑠璃を斫りたる桂なし海松(みる)ぶさささとも額(ぬか)ふ
れにける

とほく行く身にたまはりぬ琵琶だきて秋の雲みる西の
みづうみ

この世にはあらずと知りしかたらひをしづかに思ふ森
かげの道

春うたふ小鳥追ひ打つ世と知らずあくがれ出でし花の木(こ)づたひ　（以下拾首さることにふれて）

うるはしきゆめみごこちやこのなさけこの歌天(あめ)の母にそむかじ

彼の天(あめ)を知らぬ土鼠(もぐら)の宮守(みやもり)にわが歌悪しと憎まれにけり

耳しひしひじりはわかきうぐひすのよき音(ね)は問はず籠(こ)に閉ぢてのみ

われ咀ひ石のものいふ世と知りぬつめたき声に心こほりぬ

みなさけかねたみか仇かあざけりかほほゑみあまた我をめぐれる

歌はみな天(あめ)のひかりにあこがれぬ母なき国に栖みわびぬれば

わが歌は鴿(はと)にやや似るつばさなり母ある空へ羽搏(はう)ち帰

れと
大神のみまへめぐりて立たむときかしこき人ら今日を
忘るな
わきて身にしむやこの秋もみぢ葉のこきひと葉すら咀
はれの色

曙染

與謝野晶子

春曙抄（しゅんじょせう）に伊勢をかさねてかさ足らぬ枕はやがてくづれけるかな

あゝ野の路（みち）君とわかれて三十歩（ぽ）また見ぬ顔に似る秋の花

ほととぎす聴きたまひしか聴かざりき水のおとするよ

き寝覚（ねざめ）かな

海恋し潮（しほ）の遠鳴りかぞへては少女となりし父母（ちゝはゝ）の家

加茂川に小舟（をぶね）もちゐる五月雨（さつきあめ）われと　鼓（つゞみ）をあやぶみましぬ

鎌倉や御仏（みほとけ）なれど釈迦牟尼は美男（びなん）におはす夏木立かな

おもはれて今年（ことし）えうなき舞ごろも篋（はこ）に黄金（こがね）の釘（くぎ）うたせけり

養はるる寺の庫裏(くり)なる雁来紅(がんらいこう)輪袈裟(わげさ)は掛けで鶏(とり)おはまし
を

ほととぎす治承寿永(ちしやうじゆえい)のおん国母(こくも)三十にして経(きやう)よます
寺

わが恋は虹にもまして美しきいなづまとこそ似むと願
ひぬ

聖(せい)マリヤ君にまめなるはした女(め)と壇(だん)に戒(かい)えむ日も夢み

にし

頰(ほ)よすれば香る息(いき)はく石の獅子ふたつ栖むなる夏木立
かな

髪に挿(さ)せばかくやくと射る夏の日や王者(わうしや)の花のこがね
ひぐるま

紅(べに)させる人衆(にんじゆう)おほき祭街(まつりまち)きやり唄はむ男と生ひぬ

紅(あけ)の緒の金皷(きんこ)よせぬとさまさばやよく寝(ね)る人をにくむ

湯の宿

今日(けふ)のむかし前髪あげぬ十三を画にせし人に罪ありや無し

誰が罪ぞ永劫(えうがふ)くらきうづしほの中(なか)にさそひし玉と泣くひと

里ずみの春雨ふれば傘さして君とわが植う海棠の苗

ほととぎす過ぎぬたま〳〵王孫(わうそん)の金(きん)の鎧を矢すべるも

のか

さくらちる春のゆふべや廃院（はいゐん）のあるじ上臈（じやうらふ）赤裳（あかも）ひい
て来（こ）

花のあたりほそき滝する谷を見ぬ長谷の御寺の有明の
月

掛け香のけむりひまなき柱（はしら）をば白き錦につつませに
けり

三井寺や葉わか楓(かへで)の木下(こした)みち石も啼くべき青あらしかな

棹(さを)とりの矢がすり見たる舟ゆゑに浪も立てかししら蓮の池

姉なれば黒き御戸帳(みとちやう)まづ上げぬ父まつる日のものの冷(つめ)たき

更くる夜をいとまたまはぬ君わびず隅にしのびて鼓緒(つゞみを)しめぬ

きり〴〵す葛の葉つづく草どなり笛ふく家と琴ひく家と

蓮《はす》を斫り菱の実とりし盥舟《たらひぶね》その水いかに秋の長雨《ながあめ》

青雲《あをぐも》を高吹く風に声ありて讃じたまひし恋にやはあらぬ

斯くは生《お》ひてふりわけ髪の世も知らず古りし磬《けい》［＃ルビの「けい」は底本では「けつ」」うつ深院《しんゐん》のひと

春日(かすが)の宮わか葉のなかのむらさきの藤のしたなる石の
高麗狗(こまいぬ)

第一の美女(びぢよ)に月ふれ千人(せんにん)の姫に星ふれ牡丹饗(きやう)せむ

このあたり君が肩よりたけあまり草ばな白く飛ぶ秋の
鳥

家鼬(いへいたち)尾たるる相(さう)のむかしがほや瓜(うり)ひとめぐり嗅(か)ぎて
も徃(い)ぬる

才（さい）なさけ似ざるあまたの少女見むわれをためしに引くと聞くゆゑ

わが恋はいさなつく子か鮪（しび）釣りか沖の舟見て見てたそがれぬ

白きちさき牡丹おちたり憂かる身の柱はなれし別れの時に

星よびて地にさすらはす洪量（こうりやう）の人と思ふに批（ひ）もうち

がたき

花に見ませ王(わう)のごとくもただなかに男(を)は女(め)をつつむう
るはしき蕋(しべ)

在(ま)さぬ二夜(ふたよ)名しらぬ虫を籠(こ)に飼ひぬ寝がての歌は彼れ
に聞きませ

耳かして身ほろぶ歌と知りたまへ画ならばただに見て
もあるべき

ややひろく　廂(ひさし)だしたる母屋(もや)づくり木の香にまじるたちばなの花

祭の日　葵橋(あふひばし)　ゆく花がさのなかにも似たる人を見ざりし

精好(せいがう)の紅(あけ)としら茶の金襴(きんらん)のはりまぜ箱に住みし小皷(こつゞみ)

杉のうへに茅渟(ちぬ)の海見るかつらぎや高間(たかま)の山に朝立ちぬ我れ

八月や水蘆（みづあし）いとうたけのびてわれ喚びかねつ馬あらふひと

夕かぜの河原へ出づる小桟橋（こさんばし）いそぎたまふにまへざし落ちぬ

眉つくるちさき盥に水くみて兎あらふを見にきまさぬか

今日（けふ）みちて今日たらひては今日死なむ明日（あす）よ昨日（きのふ）よわれに知らぬ名

木曾の朝を馬子(まご)も御主(おしゆう)も少女笠(をとめがさ)鞍(くら)に風ふくあけぼの染に

月あると同車いなみしとが負ひて歌おほくよむ夜のほととぎす

むらさきの蓮(はす)に似ませる客人(まろうど)や荷葉(かえふ)の水に船やりまつる

蚊やりしばし君にゆだねしけぶりゆゑおぼろになりし

月夜と云ひぬ

紅（べに）しぼり緋むくなでしこ底くれなゐ我にくらべて名おほき花や

わが命（めい）に百合からす羽の色にさきぬ指さすところ星は消ぬべし

夕粧（ゆふげは）ひて暖簾（のれん）くぐれば［＃「くぐれば」は底本では「くぐれは」］大阪の風簪（かざし）ふく街にも生ひぬ

五月晴（つゆばれ）の海のやうなる多摩川や酒屋の旗や　黍（もろこし）　のかぜ

高つきの　燭（しょく）　は牡丹に近うやれわれを照すは御冠（みかむり）の珠

欠くる期（ご）なき盈つる期（ご）あらぬあめつちに在りて老いよと汝（な）もつくられぬ　（秀を生みし時）

たなばたをやりつる後（のち）の天の川しろうも見えて風する夜かな

蓮（はす）きると三寸とほき花ゆゑにみぎはの人のさそはれし

舟

憂ければぞ爪(つめ)に紅(べに)せぬ夕ぐれを色は問はずて衣(きぬ)もてまゐれ

舟にのれば瓔珞(えうらく)ゆらぐ蓮(はす)のかぜ掉のひとりは 袞竜(こんりよう)の袖

しら蓮や唐木(からき)くみたる庭舟(にはぶね)に沈(ぢん)たきすてて伯父の影なき

われを問ふやみづからおごる名を誇る二十四時(とき)を人をし恋ふる

ここすぎて夕立はしる川むかひ柳千株(せんしゅ)に夏の雲のぼる

水浴(みあ)みては渓の星かげ髪ほすと君に小百合の床をねだりし

百合がなかの紅百合(べにゆり)としものたまふやをかし二人(ふたり)の君が子の母

誰れが子かわれにをしへし橋納涼（はしすゞみ）十九の夏の浪華風流（なにはふうりう）

露の路畑をまがれば君みえず　黍（もろこし）の穂にこほろぎ啼きぬ

鳥と云はず白日（はくじつ）虹のさす空を飛ばば翅（はね）ある虫の雌雄（めを）とも

夏の日の天日（てんじつ）ひとつわが上（うへ）にややまばゆかるものと思ひぬ

百間(ひやくけん)の大き弥陀堂ひとしきり煙みなぎり京の日くれぬ

夕されば橋なき水の舟(ふな)よそひ渡らば秋の花につづく戸

母屋(もや)の方(かた)へ紅(あけ)三丈の鈴の綱(つな)君とひくたび衣(きぬ)もてまゐる

君やわれや夕雲を見る磯のひと四つの素足(すあし)に海松(みる)ぶさ寄せぬ

里ずみに老いぬと云ふもいつはりの歌と或る日は笑め

りと思(おぼ)せ

きざはしの玉靴(たまぐつ)小靴(をぐつ)いでまさずば牡丹ちらむと奏(さう)さま
ほしき

恋しき日や侍(さも)らひなれし東椽(とうえん)の隅のはしらにおもかげ
立たむ

ほととぎす岩山みちの小笹(をざゝ)二町深山(みやま)といふにわらひた
まひぬ

あやにくに虫歯（むしば）［＃ルビの「むしば」は底本では「むしは」］

病む子とこもりゐぬ皷きこゆる昼の山の湯

君によし撫でて見よとて引かせたり小馬ましろき春の夕庭

花とり〴〵野分の朝にもてきたる十人（とたり）の姿よしと思ひぬ

七（なゝ）たりの美（び）なる人あり簾して船は御料（ごりやう）の蓮きりに行く

かしこうて蚊帳に書（ふみ）よむおん方にいくつ摘むべき朝顔の花

ふるさとやわが家（や）君が家（や）草ながし松も 楓（かへで）もひるがほの花

ほととぎす山門（さんもん）のぼる兄のかげ僧服（そうふく）なれば袖しろうして

よき箱と文箱とどめていもうとは玉虫飼ひぬうらみ給ふな

この恋びとをしへられては日記（にき）も書きぬ百合にさめぬと画蚊幮（ゑがや）に寝（ね）ぬと

水にさく花のやうなるうすものに白き帯する浪華の子かな

春の池楼（ろう）ある船の歩み遅々（ちゝ）と行くに慣れたるみさぶらひ人

夏花は 赤熱（しやくねつ） 病める子がかざしあらはに歌ひはばから

ぬ人

伯母（をば）いまだ髪もさかりになでしこをかざせる夏に汝（な）れは生れぬ　（弟の子の生れけるに夏子と名をえらみて）

行く春にもとより堪へぬうまれぞと聞かば牡丹に似る身を知らむ

妻と云ふにむしろふさはぬ髪も落ちめやすきほどとなりにけるかな

われに遅れ車よりせしその子ゆゑ多く歌ひぬ京の湯の
山

夕かぜや羅の袖うすきはらからにたきものしたる椅子
ならべけり

わが愛づる小鳥うたふに笑み見せぬ人やとそむき又お
もひ出ず

かへし書くふたりの人に文字いづれ多きを知るや春の
染紙（そめがみ）

われぼめや十方(じふぱう)あかき光明のわれより出でむ期(ご)しるものゆゑ

ふりそでの雪輪(ゆきわ)に雪のけはひすや橋のかなたにかへりみぬ人

かけものゝ牛の子かちし競馬(けいば)のり梅にいこふをよしと思ひぬ

酒つくる神と注(ちう)ある三尺の鳥居のうへの紅梅の花

われにまさる熱えて病むと云ひたまへあらずとならば君にたがはむ

菜の花のうへに二階の障子（さうじ）見え戸見え伯母見えぬるき水ふむ

あやまちて小櫛（をぐし）ながしゝ水なればくぐるは君が花垣なれば

河こえて 鼓（つゞみ）凍らぬ夜をほめぬ千鳥なく夜の加茂の里

びと

鹿（しゝ）が谷尼は磬うつ椿ちるうぐひす啼きて春の日くれぬ

くれなゐの蒲団かさねし山駕籠に母と相乗る朝ざくら
路

あゝ胸は君にどよみぬ紀の海を淡路のかたへ潮わしる
時

まる山のをとめも比叡の大徳（だいとこ）も柳のいろにあさみどり

して

法華経の朝座(あさゞ)の講師(かうし)きんらんの御袈裟(みけさ)かをりぬ梅さとちりぬ

いでまして夕むかへむ御轍(みわだち)にさざん花(くわ)ちりぬ里あたたかき

歌よまでうたたねしたる犯人(ぼんにん)は花に立たせて見るべかりけり

うれひのみ笑みはをしへぬ遠(とほ)びとよ死ねやと思ふ夕もありぬ

御供養(みくやう)の東寺(とうじ)舞楽(ぶがく)の日を見せて桜ふくなり京の山かぜ

金色(こんじき)のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に

紅梅や女(をなご)あるじの零落(れいらく)にともなふ鳥の籠かけにけり

大木(たいぼく)にたえず花さくわが森をともに歩むにふさふと云

ひぬ

しろ百合と名まをし君が常夏(とこなつ)の花さく胸を歌嘆(かたん)しまつる　（とみ子の君に）

審判(さばき)の日をゆびきずくるとげにくみ薔薇(ばら)つまざりし罪とひまさば

山の湯や懸想(けさう)びとめく髪ながの夜姿(よなり)をわかき師にかしこみぬ

廊馬道(らうめどう)いくつか昨夜(よべ)の国くればうぐひす啼きぬ春のあけぼの

こゝろ懲りぬ御兄(みあに)なつかしあざみては博士得ませと別れし人も

うへ二枚(まい)なか着(ぎ)はだへ着(ぎ)舞扇はさめる襟の五ついろの襟

きよき子を啞とつくりぬその日より瞳なに見るあきじひの人

人春秋(ひとはるあき)ねたしと見るはただに花衣(きぬ)に縫はれぬ牡丹しら
菊

女(め)さそひし歌の 悪霊(あくりやう) 人生みぬ髪ながければ心しませ
や

春の夜の火かげあえかに人見せてとれよと云へど神に
似たれば

明けむ朝われ 愛着(あいぢやく) す人よ見な花よ媚ぶなと袋に縫へ

な

にくき人に柑子(かうじ)まゐりてぬりごめの歌問ふものか朝の
春雨

よしと見るもうらやましきもわが昨日(きのふ)よそのおん世は
見ねば願はじ

酔ひ寝ては鼠がはしる肩と聞き寒き夜守(も)りぬ歌びとの
妻

手（た）ぢからのよわや十歩（とあし）に鐘やみて桜ちるなり山の夜の寺

兼好を語るあたひに伽羅たかむ京の法師の麻の御（み）ころも

かくて世にけものとならで相逢ひぬ日てる星てるふたりの額（ぬか）に

春の夜や歌舞伎を知らぬ鄙びとの添ひてあゆみぬあかき灯の街

玉まろき桃の枝ふく春のかぜ海に入りては真珠（しんじゅ）生むべき

春いそぐ手毬ぬふ日と寺々（てらぐ）に御詠歌（みえいか）あぐる夜は忘れゐぬ

春の夜はものぞうつくし怨（ゑん）ずると尋（ひろ）のあなたにまろ寝の人も

駿河の山百合がうつむく朝がたち霧にてる日を野に髪

すきぬ

伽藍すぎ宮をとほりて鹿(しか)吹きぬ伶人(れいじん)めきし奈良の秋か
ぜ

霜ばしら冬は神さへのろはれぬ日ごと折らるるしろが
ねの櫛

鬼が栖むひがしの国へ春いなむ除目(ぢもく)に洩れし常陸ノ介
と

髪ゆふべ孔雀の鳥屋（とや）に横雨（よこあめ）のそそぐをわぶる乱れと云ひぬ

廊ちかく鼓（つゞみ）と寝ねしあだぶしもをかしかりけり春の夜なれば

集（しう）のぬしは神にをこたるはした女か花のやうなるおもはれ人か

さは思へ今かなしみの酔ひごこち歌あるほどは弔ひますな

君死にたまふことなかれ

旅順口包囲軍の中に在る弟を歎きて

あゝをとうとよ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ、
末に生れし君なれば
親のなさけはまさりしも、
親は刃(やいば)をにぎらせて
人を殺せとをしへしや、
人を殺して死ねよとて

二十四までをそだてしや。

堺（さかひ）の街のあきびとの
旧家（きうか）をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば、
君死にたまふことなかれ、
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとても、　何事ぞ、
君は知らじな、　あきびとの
家のおきてに無かりけり。

君死にたまふことなかれ、
すめらみことは、戦ひに
おほみづからは出でまさね、
かたみに人の血を流し、
獣（けもの）の道に死ねよとは、
死ぬるを人のほまれとは、
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思（おぼ）されむ。

あゝをとうとよ、戦ひに
君死にたまふことなかれ、

すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは、
なげきの中に、いたましく
わが子を召され、家を守（も）り、
安（やす）しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる。

暖簾（のれん）のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻（にひづま）を、
君わするるや、思へるや、
十月（とつき）も添はでわかれたる

少女ごころを思ひみよ、
この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき、
君死にたまふことなかれ。

恋ふるとて

恋ふるとて君にはよりぬ、
君はしも恋は知らずも、
恋をただ歌はむすべに
こころ燃え、すがた癯せつる。

いかが語らむ

いかが語らむ、おもふこと、
そはいと長きこゝろなれ、
いま相むかふひとときに
つくしがたなき心なれ。

わが世のかぎり思ふとも、
われさへ知るは難からし、
君はた君がいのちをも

かけて知らむと願はずや。
夢のまどひか、よろこびか、
狂ひごこちか、はた熱か、
なべて詞に云ひがたし、
心ただ知れ、ふかき心に。

鼓いだけば

鼓(つゞみ)いだけば、うらわかき
姉のこゑこそうかびくれ、

袿（うちぎ）かづけば、華やぎし
姉のおもこそにほひくれ、
桜がなかに簾（すだれ）して
宇治の河見るたかどのに、
姉とやどれる春の夜の
まばゆかりしを忘れめや、
もとより君は、ことばらに
うまれ給へば、十四まで、
父のなさけを身に知らず、
家に帰れる五つとせも
わが家ながら心おき、

さては穂に出ぬ初恋や
したに焦るる胸秘めて
おもはぬかたの人に添ひ、
泣く音をだにも憚れば
あえかの人はほほゑみて
うらはかなげにものいひぬ、
あゝさは夢か、　短命（たんめい）の
二十八にてみまかりし
姉をしのべば、　更にまた
そのすくせこそ泣かれぬれ。

しら玉の

しら玉の清らに透（とほ）る
うるはしきすがたを見れば、
せきあへず涙わしりぬ、
しら玉は常ににほひて
ほこりかに世にもあるかな。

人のなかなるしら玉の
をとめ心は、わりなくも、
ひとりの君に染（そ）みてより、

命みじかき、いともろき
よろこびにしもまかせはてぬる。

冥府のくら戸は

よみのくら戸はひらかれて
恋びとよよといだきよれ、
かの天（あめ）に住む八百星（やほぼし）は
かたみに目路（めぢ）をなげかはせ、
土にかくれし石屑（いしくづ）は
皆よりあひて玉と凝れ、

わが胸こがす恋の息（いき）
今つく熱きひと息（いき）に。

底本：「恋衣　名著復刻　詩歌文学館」日本近代文学館
　１９８０（昭和55）年４月１日発行
底本の親本：「恋衣」本郷書院
　１９０５（明治38）年１月１日発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の旧字を新字にあらためました。固有名詞も原則として例外とはしませんでしたが、人名のみは底本のままとしました。
※変体仮名は、通常の仮名にあらためました。
※底本中で脱漏や誤りの可能性がある点については、「與謝野鉄幹・與謝野晶子集　明治文学全集51」筑摩書

房、１９６８（昭和43）年、「與謝野寛　與謝野晶子　窪田空穂　吉井勇　若山牧水集　日本現代文学全集37」講談社、１９６４（昭和39）年を参照し、補訂しました。
入力：武田秀男
校正：kazuishi
２００４年6月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。